

表層生活

La vita superficiale

大岡玲



文藝春秋

表層生活 大岡玲

La vita superficiale

表層生活

一九九〇年三月十五日 第一刷

定価はカバーに表示してあります

著者 大岡玲

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋
〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷 大日本印刷
製本 加藤製本

© Akira Oka 1990, Printed in Japan
ISBN4-16-311710-5

万一落丁乱丁のあった場合はお取替いたします

著者紹介

一九五八年、東京生まれ。私立武蔵高等学校を経て東京外国語大学ロマンス系言語学科修士課程終了、現代イタリア文学を学ぶ。

八七年「緑なす限りの丘を」で作家デビュー。八九年、「黄昏のストーム・シーディング」で第二回三島由紀夫賞受賞。続いて九〇年「表層生活」で第一〇二回芥川賞を受賞。

現在、武蔵野美術大学非常勤講師。祖父は歌人の大岡博、父は詩人の大岡信氏と三代に亘る文芸の家系である。

作品集
表層生活
目次

わが美^{うつく}しのポイズン^うヴェイル
7

表層生活 119

あとがき 226

カバー

彫刻 安田侃「回生」(洞爺湖畔)
撮影 綿引幸造

口絵写真・著者近影
撮影 大海秀典

ブックデザイン

坂田政則

作品集

表層生活

わが美^{うつく}しのポイズン^{ポイズン}ヴィル

初出「文學界」平成元年六月号

I

風が吹いていた。北西の風だった。勢いはあまり激しくはなかったが、それでもぼくのからだに直線的な冷たさをぶつけてくる。さまざまな障害物や曲り角をすりぬけてくる都会の風が、たとえどんなに激しくても、なまぬるい感触を肌伝えてくるのは、まるで違っていた。

ぼくが立っている土手の下をゆったりした速度で東南に流れている河にも、間断なくさざ波が現われている。つまり、ニュートン力学における風力と波の関係という観点から見れば、風が吹いているということは疑いをはさむ余地のない事実なのだった。

が、その事実とぼくの間には、明らかにずれがある。河の対岸を眺めているうちに、たぶん、そうなったのだ。

土手から向こう岸までは、目測でおよそ百メートル。そしてそこからは低地が始まっていて、色あせた穂をつけた葦と枯れたすすきが見渡す限りどこまでもみっしりと生えていた。目に立つ高さを持った樹木は一本もない。人工的な構造物も、用途不明の小さな鉄塔がところどころに立っているだけだった。一・五の視力でも物の形が淡くかすんでしまうほどの彼方で、自動車らしい物体が動く点になっている。適切な形容詞が思い浮かべられない広漠とした空間だった。

その内部で葦とすすきが、揺れ、うごめいている。じつと見据えていると、それらを揺さぶっているのは風ではなく、大地の身動きそのものではないかと思えてくる。平衡感覚の倒錯であるのはわかり切っていたが、異様であることに変わりはなかった。

「ちよつと、すごい、広さでしょう」デイヴィッドの言葉に、ぼくは足元が覚束ない感じをこらえてふりかえった。単語一つ一つを強く発音する点をのぞけば、見事といつてよい日本語だった。

「ほんとうに。アメリカならいざしらず、日本の、それも東京からわずか数十キロのところこんな場所があるなんて想像もしていませんでした」

「全部で、四千万平方メートル近い、と聞いてます。正確な数字は、たぶん和尚さんが知っているでしょう」と彼は、ぼくたちが立っている地点から北に三百メートルほど行ったところにある小山のような森の塊を、軽い右手の振りで示した。二時間前に、彼とぼくはその森の中に

ある寺で初めて出会ったのだ。

「もつとも」と彼は言葉をついだ。「二、三百万平方メートルの誤差があったところで、印象的には変化はないでしょう。とりわけ、小さい場所に住み慣れている東京の人には、ね」

皮肉を言っている風ではない。率直な意見を言っているのだろう。白いくらいの金髪と、それよりは少し濃い色合いの鬘ひげでふちどられた彼の顔には、穏かな、不自然なくらい穏かな微笑が現われているだけだ。東洋の静謐と調和といった内容で欧米人向けビデオを作る時には、案内役としてぜひとも出演してもらわなければならない人材、という雰囲気だった。

もつとも、彼にその表情をされると、ぼくの方はあまり平靜な気分にはなれない。なんとなく自分の日本人度を試されているような気分にはさせられるからかもしれない。広告業という仕事の場合で出会う外国人にはほとんど見られないタイプに思えた。

「さきほどの話では、遊水池だということだけれど、水なんか全然ないじゃないですか」

「ええ、三年前にこの町にはじめて来た時、ぼくもそう思いました。基本的には、洪水の時の予防なんだそうです。ただ、もう十数年水びたしになったことはないそうです。上流にダムがたくさんあるせいですね。乾き切っているでしょう？ 一月、二月になるとものすごい西風が埃を巻き上げるんです」

ぼくはうなづいた。たしかに乾いている。しかし、その乾き方は、オールドミスOld Missの不思議な家庭教師が傘をさしたまま風に乗ってやってくる、といった優雅な乾燥具合でもなければ、リ

ヴォルヴァーを握って対峙する二人の男の間を丸いタンブルウィードが転がっていく、といった荒々しい乾燥度でもないようだった。

無反省で忘れっぽい人物の記憶のように、表面は乾き切っているにもかかわらず、その下の部分は方向性も出口もないじくじくした湿り気を帯びている。ぼくは妄想に近い想像力でそう思った。心臓の下あたりにいやな感覚があった。低地の広さとデイヴィッドの微笑にあてられたらしかった。

「興味深い場所ではあるけれど、あまり長く見ていると目がまわりそうだ。もうもどりましょう」とぼくが言うと、彼はうなづいて土手を降りはじめた。長身を前かがみにして足元に注意しながら下っていく様子は、大きな細い円弧が動いているようだった。

土手を降り切って畑道に出ると、デイヴィッドはまた話し出した。

「この遊水池には、昔からいろいろな問題があるんです。あなたも知っているかもしれないけれど、ここは百年くらいまえに鉱山の毒が大量に流れこんで大問題になったところなんですよ。日本最初の公害。この真中あたりに村があったんです。国が強制的にその村人を立ちのかせたので、それに抗議して地方政治家が天皇に直接訴えたりしたそうです。ご存知でしょう？」

そういう事実を高校時分に習った覚えはあったが、自分のいる場所とその記憶がうまく接続しないので、一応かぶりをふった。するとデイヴィッドの表情が一瞬強張った。

「今でも、問題はいろいろあります。あなたは広告の仕事をなさっているわけだから、きっと何かご存知でしょうが……」

ぼくはあっさりとは否定した。本当に何も知らなかったからだ。広告業にたずさわる人間を情報の万能袋のように思ってしまう人がよくいるが、それは誤解だ。業種全体の情報量の総和がどんなに膨大であっても、働いている個人個人は所詮一人に過ぎない。そして、その一人一人の能力は、週刊誌を数誌なめるように愛読している中年女性を凌駕したりはしないものなのだ。いや、莫大な量の情報に受動的に身をさらす分だけ、かえって彼女たちより忘却の度合が強いかもしれない。少なくともぼくはそうだ。

ぼくがそんな説明をすると、デイヴィッドは、なるほどね、と呟いた。そして、

「でもまあ、せっかくここにいらしたんですから、これからは少し注意をはらってみて下さい。ぼくも、ここで生活している者として、いろいろあなたと話してみたいことがあるんです。たしかにあなたが言われたことは理解できませんが、それにしてもあなたの仕事が現実の社会を大きく動かしているのも事実じゃないですか？　ぶしつけな言い方ですみません。知り合いになれたんで、ぼくはうれいんですよ。アメリカでも日本でも、広告の仕事をしている方と知り合いになったことがないんです。また、ぜひ、連絡してください。ぼくはあの寺には、入りびたっていますから」と、彼は生真面目な調子でいって、手をさし出した。ぼくもなりゆきで手を出したが、全体的印象とはそこだけが異なる彼の強い握手の仕方に圧倒され、どうしたわけ

か億劫な気分になってしまった。新しい仕事の始まりとしては、あまり良い辻占ではない。めんどろなことに発展するかもしれない、という予感がした。

もちろん、最初はそんな予感などまるでなかった。いくつかの仕事が続けざまに片づいて少し手の空いたづくりに、寺院の宣伝を担当して欲しいと社長が言った時は、ああ、またか、と思っただけだった。

確固とした意志も定見もなく入社した中規模の広告会社で、六年間のあいだにぼくが得た評価は、ちょっとした変わり者というものだった。その評価が年月と共に定着していく過程で、社長をはじめとする上司たちは、毛色の変わった依頼があるとぼくにやらせてみる、という癖を身につけた。

得体の知れない植物から取り出した成分による新しい瘦身法とか、ペット専門のダンス教室といった比較的穏かなものにはじまって、脱税のためのダミー会社を正当化する必要が生じたときに資料にする、決して一般には日の目を見ない広告とか、からだ中の関節をはずして小さい箱に入りストレスを減らす療法、あるいは念力訓練によって金儲けをする方法、といったものに至る、送り手がいて受け手があるという宣伝効果の基本を疑わせるような仕事を、ぼくはまともな仕事の合い間合い間に取り扱った。それも、あまり感情を交じえずにいねいに。

そういう性分なのだ。が、そういう態度が変わり者説を一層強めたのかもしれない。